東京日々新聞

七百八號

越後の國新潟の藝妓ゑ
今川屋雛と言る者
あり面色
雛の
ごとく
美あ中
ゼ容桃
桜のごとく艶あれど強と採て客と浮くもの妙
あるい其繁昌殆ど三味線の彈もさらぬ是ふ於て
畜財千四ふ及べり然るふ雛ふ情郎ありて名を敦賀屋喜
右エ門と呼び廿年來馴親〳〵既ふ二女を生し長女い等〳〵
藝妓ゑりはじも漆膠の中ゑり共金い敵の世ゑりゑん敦喜二朝米相場の
失策より千有餘四の損とゑり夫を償ゑん為め窃ふゑの畜財を持出しゑると雛い夢ふざふきらぬ思し〳〵
闇浮陀金の開帳とふさゑと輦笥の引出し〳〵を明らしふ光明何ぞへ紅光りを放ちて影ざふ止ぬ是必竟
教喜の所為ふらんと是と公ふ訴へんとせしゑど止る若ありて其事ふ至らざれども
遂ふ為ふ病ひとゑり又數許あらぬて快氣ふ至らとゑり

蕙齋芳幾

山々亭有

人形
甲 真足屋
渡辺彫栄